

昭和三年二月十六日第三種郵便物（日發行）

聖書之真理

第四十九號

十一月號

主筆 江原萬里

正義とは何か

主筆

信仰と行爲

主筆

日本は何處に往く（上）

江原萬里

エレミヤ記の研究

江原萬里

エレミヤの聖召（下）

農村の宗教的墮落

柏木通信

齋藤宗次郎

祖父の書翰

江原萬里

世界的大恐慌の襲來

編輯餘録

昭和六年十一月一日發行

世界的大恐慌の襲來

今は世界到るところ經濟恐慌に襲はれて居る。暗雲は殊に歐洲大陸に低迷し、そこから波及しつゝある。地球上全人類生活の將來は甚だ暗澹である。我國に於ては此等の事を軽く見、平和なきに平和と云ふもの、多く、つい近來まで今に世界的に景氣が挽回するかのやうに思つて之に期待をかけて居た者が甚だ多い。此の度滿州の一角で起つた日支軍隊の衝突に世界中驚愕したのは何を意味するか。國民は凡て樂觀、其の將來の深憂を思はない。

抑も此の世界的暗黒の直接の原因は勿論世界大戰争に由來した。思ひ見よ今より近々二十年の昔を。其の當時ドイツ帝國は旭日の天に冲する勢をもつて興隆し以て天下に覇を唱へんとし、其の陸軍は精銳無比と稱せられ、海軍は堂々として大英帝國のそれを壓せんす勢があつた。其の學術の深遠精緻なる其の産業の優秀盛大なる、眞に現代世界の驚異であつた。今其の盛榮何處にかある。彼の國が世界諸國に優越し、且つ其の文化を世界に擴めるためには武力をも敢て辭しなかつた時ドイツに世界の大破綻が臨んだのである。

世界大戰争は勿論ドイツのみの責任ではない。英國佛國奧國露國其他現代諸國民はドイツと大同少異の世界觀を有し、相似たる方針を以て進んだ故に遂に全人類の白熱の衝突があつたのである。

大戰争は遂に休戦となつた(終つたのではない)。其の始め世界

の輿論は悉く假令戰爭は起つても、英國には三ヶ月の食しかなく、其の他の國も大同少異、殊に各國の經濟網は密であつて其の相互的利害は敵味方に分裂することを防止し、必ず短日月で終るであらうと思つた。然るに戰爭起るや四年の歳月を費し、歐洲大陸は勿論のこと、アメリカ及びアジヤも亦戰渦中に卷き込まれた、千萬人の死者傷者無數、財帛千億圓は悉く灰燼となつた。此の結果が現在見ることの世界的な大恐慌である。過去幾星霜我等の父祖が營々として蓄積し築き上げた財産を現代の遊蕩無賴兒が一朝にして蕩盡したのである。其の後に來るものは此の零落窮困であらねばならない。

人は云ふ、現在の不景氣は世界的生産過剰に因る。そうではない。戰爭設備の過剰に因るのである。そして實際生活設備の破壊不足に因るのである。嘗て戰爭のため急造した軍需品製造の設備が今尙多數に残存し、此設備のために起した巨額の戦債が重荷となり、他方四ヶ年の間無益なる相互屠戮焚燒のため各戸眞の動手を失ひそれを支ふる購買力がなくなつたからである。

此の結果が今まで顯はれずして居たのは戰爭氣分が残存し且つ將來に對して空しき期待があつて、目前を胡麻化して來たからである。最早胡麻化しはきかない。今後は益々事實の真相が顯はれ、人類の罪とその審判の恐怖が明白となるであらう。前途暗澹である。あ、背ける子らよ、落魄江湖に彷徨う放蕩兒よ、汝らの神に歸へり來れ、然り、主イエス・キリストの御父なる神に。

聖書之眞理

第四十九號

昭和六年十一月一日發行

正義とは何か

主 筆

固く正義に立て、世の不正不義と苟合する勿れ
 と云ふ、一體正義とは何であるか。多くの人々は
 正義とは良心の命するところのものと思ふ。ただ
 然し、複雑極まりなき我等の生活の個々の具體的
 場合に於て、何が正、何が義、何が不正、何が不
 義であるか分明でないことが多い。此の場合自分
 が正義なりと思惟したものを正義とし、固く之を
 把持する時、獨よがりの我執偏狹となる事も尠く
 ない。自分が正義と信じたものは必らずしも眞實
 の正義と一致しない。然かも飽まで之を固守する

時、自己中心主義とならざるを得ない。世と妥協
 しないことは善い。然し自分よがりの偏狹は決し
 て正義に立てるものではない。

基督者の包懐するところの正義とは何であるか。
 答へて云ふ、キリストを信する事之である。即ち
 キリストの十字架によつて顯はし給ふた神の義を
 信受する事である。罪人を救ふために己が獨子を
 も惜しみ給はざりし神が凡ての凡となり給ひ、我
 を張り、己を守るよりもそれに一切を委ねて、自
 己が全く無となることを喜び、己が坐作行動の
 うちにキリストの活きて働き給はんことを願ひ求
 めることである。かくて神の聖意がキリストに由
 つて信する者の生活に行はれる。

これが基督者の正義である。それはキリストを
 信する信仰以外の何物でもない。正義の何たるか
 を知らんと欲する者よ、現在我等の靈魂に直接働
 きつゝあり給ふ愛のキリストを知れ。

信 仰 と 行 爲

信仰は行爲でない。信頼である。努力でない。おまかせである。然し乍ら行爲の伴はない信仰は信仰ではない。

然らば信仰は如何なる行爲を随伴するかと云ふに、信頼を妨げる一切の障碍を突破する行爲を随伴する。それは行爲である。然し乍ら、それは信仰に伴ふて必然に派生する行爲であつて、信仰と對立する意味での善行ではない。それを目的とする行爲ではない。故に信仰と行爲とは截然兩者を區別し得る。

己が生命を惜まず正義を盡くすこと、あらゆる困難に堪え忍び志す所を貫徹すること、隣人を愛し之が乏しきを賑はし、其の苦惱を分担し、百方之を勵まし導くこと、キリストのため十字架を負うて之に従ふ事、若し之を目的とした時は、それ

は信仰に對立する行爲である。然れども若しキリストと合體せんとすることより生ずるならば、それは信仰に伴うて必然に派生する行爲である。かかる行爲を伴はない信仰は虚偽である。眞の信仰は必らず之を伴ふ。是信仰は律法行爲にあらず、然かも律法を全くする所以である。

されば信仰のみに由つて我等は安全である。義しい行爲をしなないと責められても、愛がないと云つて打たれても安全である。信仰も必要であるが、善行も必要であるとか、恩恵になれてはいけない、信仰に由つて神に對する罪の赦された以上は、進んで善き行爲をしなければならぬとか云ふのは、未だ眞の信仰は必らず、此種の善行を派生することを知らない者の言である。

パウロもルーテルも古來信仰の勇者は他を顧みず、まつしぐらに只信仰のみで生きた。我等も亦然るべきである。

日本は何處に往く（上）

江原萬里

一、世界に獨異なる國體

數年前、米國の首唱に由り世界各國は所謂非戰條約を取交はし、今後國策遂行の手段としての戰爭を廢棄する事を、各々嚴肅にその人民の名に於て誓約したのである。世界の諸國は反對を唱ふる者一國もなく、皆欣然として此の條約に参加した。獨り我が國に於ては、一度此の條約の批准を樞密院に諮詢せられるや、國論沸騰し、一時はあはや拒否せられんとする形勢にまで立ち至つた。それは條約の趣旨其の物に對して反對があつたのではない。偶々其の遵奉を各國皆その人民の名に於て誓約するとの一句があるためであつた。

抑も條約締結のことは天皇の大權事項に屬し、人民には何等の權能がない。故に我が國の君主が

その人民の名に於て誓約する如きは國體の許さざるどころ、かゝる條約を批准すべきでないこと云ふのが反對論の要旨であつた。ごとのつまり條約は批准せられた。それと共に全世界に向つて一つの宣言書が發せられ、我が國は世界何れの國よりも異なる國體を有する事を聲明せられたのである。我が國體なるものは世界獨特にしてその驚異であることは此の一事に由つても知られるのである。

之を我が國の憲法學者の言に聞く。近年我が國體の特異性を寸分の疑義なきまで明白、而して極端に述べた學者は故上杉愼吉博士であつた。昨年其の遺稿を編纂され『日の本』と題し、私にも亦一部寄贈せられた。今之を閲讀するに、其の中『國體と憲法の運用』と題して左の文章がある。

『歐羅巴諸國を觀れば、何れの國も人民が主權者である。……歐羅巴の建國思想は、何れの淵源に就て見ても皆民主である。人民全體が主

權者と云ふことになつて居る（一〇五頁）。

『歐羅巴建國の本義、其後の變遷、國家法人説に至るまでの有様と、我日本の建國の體制とを比較して見ると、根本的の違を認める。我建國の體制のことは詳しく申しませぬけれども、人民全體が主權者であつて、君主なる者を人民の役人として置くこと云ふ思想は、我國に於ては初めより無いのである。我國建國の第一に歴史に現れて居る事實は天祖が「此國は我子孫之を統治すべきの國である」と云はれたことが始まりで、先づ君主の何人たることが定つて、君主が自ら認定して、我は君主なりと云ふことが定まつて、茲に何人が臣民たるかと云ふことが定つて居る。建國の體制が先刻申した歐羅巴の建國の體制とは全く反對になつて居る。之が私が日本の國體を論ずるには統治權の所在が何人であるかと云ふことを論ずるに、歐羅巴人の思想を

以て論ずることが出來ぬと云ふ根本の理由であります』（一七頁）。

即ち、我國の國家的體制は世界中何處を探し求めても他に一つもない、唯一獨特、眞に不思議な體制であるとの論である。その然る所以は、世界の諸國は悉く人民を主とするに對して、我が國體は皇室を中心とするからであるとのことである。

二、ユダヤの國體

此の事について我が國體の獨異性と相似たる獨異性を有するものはユダヤ民族である。ユダヤ人は己が民族を以て萬國に比類なき唯一獨特の民族とし、その然る所以は、宛も我國が皇室を中心とする如く、彼等はその神エホバを中心とするからである。

上杉博士がユダヤ思想を以て民主思想とするのは誤つて居る。博士は歐羅巴の民主思想の因つて

來つた淵源四つ擧げ、その第三に云ふ。

『第三の淵源は猶太の耶蘇教の思想、是は舊約全書を見ても、代々國王と云ふ者はあるけれども、國王と云ふ者はどうして出來たかといふと、何時でも人民全體と神様との約束に依て、或一人を國王にするに爲つて居る。(中略)此國王なるものは、自己の權力でない、人民の權力を行ふ。神様の命に由り人民の屬する權力を行ふと云ふことになつて居る。』(一〇七頁)

聖書學者でない博士の此の議論は間違つて居る。ユダヤ人は昔も今も民主主義でなく、神主主義である。國王の權力は人民から出ない。神から出た。博士が今少し舊約全書を研究されるか、或は一時期歐洲に盛であつた帝王神權説の由來を研究されたならば、決してかゝる議論は出ない筈である。若し博士が舊約聖書を研究せられたならば、ユダヤ人の國體思想と我が國の國體思想との類似に驚か

れたであらう。

ユダヤ人のエホバ中心主義の選民思想が世界に於て唯一獨特である如く、その如く我國の皇室中心主義の國體思想も亦唯一獨特である。前掲上杉博士の所論に『我國の建國の第一に歴史に現れて居る事實は天祖が「我國は我子孫之を統治すべき國である」と云はれたことが始まりで、先づ君主の何人たるかが定つて、君主が自ら認定して、我は君主なりと云ふことが定つて、茲に何人が臣民たるかと云ふことが定つて居る』と在るに甚だ相似て、ユダヤ人については、先づ神の何者たるかが定つて、詳言せば、神が自ら認定して、我は神なりと云ふことが定つて、茲に何人が神の民たるかと云ふことが定つたのである。

アブラハム九十九歳の時エホバ、アブラハムに顯れて之に言たまひけるは、我は全能の神なり、汝我前に行みて完全かれよ。……我汝とわが契

約を立つ、汝は衆多おほくの國民の父となるべし。：
 ；汝の名をアブラハム（衆多おほくの人の父）と呼ぶ
 べし。：：王たち汝より出づべし。我わが契約
 を我と汝および汝の後の子孫との間に立て永久
 の契約となし、汝および汝の後の子孫の神とな
 るべし。我汝と汝の後の子孫に此汝の寄寓やぐらる地
 即ちカナンカナンの全地を與へ永久の産業となさん。
 而して我汝等の神となるべし（創世記一七章）。

我が國體とユダヤ人の國體との相違するところは
 は、我が國に於ては天祖が『我子孫』と云はれた
 子孫は皇室を指し、人民全體を指さない。然るに
 エホバがアブラハムに『汝の子孫』と言ひ給うた
 子孫は、常にアブラハム直系の子孫を指すのみで
 なくして、ユダヤ人全體が『アブラハムの裔すえ』で
 あつた。それ故子孫が皇室であるならば、ユダヤ
 人は悉く皇室であらねばならない。子孫が皆臣民
 であるならば皇室は一つもない。それはその筈で

ある。ユダヤ人の君主はエホバであつて、アブラ
 ハムの子孫は悉くその民であつたからである。王
 權は民より出でず、エホバから出た。エホバが預
 言者に由つて之に膏を注がしめ給ふた者を以て王
 とした。王は民を代表せず、眞の王なるエホバを代
 表した。宛も我國の裁判官が天皇の名によつて裁
 判すると同様に神の御名で君臨した。さればユダ
 ヤ人の思想を以て民主主義とするのは不當である。

我が國體が皇室中心である如く、ユダヤ人の國
 體はエホバ中心であつた。其の異なるところは我
 が國體に於ては天祖の直系の一族が君主として定
 められるに反し、ユダヤ人では君主は永久にエホ
 バであつた。アブラハムの子孫は何人も悉く永久
 にその民である。我が國體にては天皇と臣民とは
 其の出所に於て大なる差異あり、皇室は國民でな
 く、別種の存在である。之を以て我が國體を單に
 君主主義と云はずして、之を皇室中心主義と云ふ

所以である。天皇中心と云はずして皇室中心と云ふ時、只一人の天皇を思はず、皇祖以來列聖相承け萬世一系の天皇を思ふのである。こゝにユダヤ人と我國民とその國體觀念の相違がある。その然る所以は宗教觀念の相違から來た。

三、皇室中心主義の特徴

かやうに我が國體觀念はユダヤ人の選民思想と相似て萬國無比、世界特異である。この特異なる所以は前に述べたやうに皇室中心主義に在る。即ち皇室を中心として、我國の政治は勿論、社會教育産業、然り宗教上の諸制度までも出來上つて居るのである。かゝる國體觀念を最も明瞭にし、且つ之を基礎として國家的社會的組織を最も完全に組立てたのは、明治維新以後であることは云ふまでもない。明治時代は實に我が國體未曾有の隆盛期であつた。今其の特徴を略叙せば、

一、皇室は確實に政治上の中心である。天皇は神聖にして侵すべからず、而して國の大權は悉く天皇の總攬せらるゝところ、文武の百官有司を統御して國土の上諸民に君臨し、國歩を定め國運を導く。宛も太陽中に輝き、諸星之を圍繞するが如く、又太陽は此等の諸星を引具して宇宙の一角より他の方角に向つて勇猛勵進しつゝあるが如くである。かくして日清日露の戦役に赫々たる大戦勝を得、更に世界の大戦を経て世界最大強國の一となり、今後も亦皇室を中心として、政治上軍事上、大平洋に、亞細亞大陸に、國家的大膨張を企てやうとしつゝある。

二、皇室は日本民族の宗家である。往時氏族に氏の長者があつた如く、皇室は日本民族の宗家であり、一家に主人のある如く、天皇は國民的大家族の家長である。故に先年京都で行はせられた御即位式の時、國民に下された詔勅に、朕と汝等と

は義は君民なれど情は親子なりと宣せられたのはそれである。此の主義の闡明である。嘗て帝王神權説の權威フキルマーが『家長政治』を著したその理想は、十七世紀の英國に行はれずして、現代の日本に行はれたのである。教育勅語戊申詔書を基本として全國の學校は此の主義を國民に教えつつある。

三、天皇は天祖と臣民との間を執成するところの大祭司である。我が國體に於ける皇室中心主義は常に政治上のみでなく、又國民の社會生活に貫徹されるのみでない。國民的宗教の基礎とせられて居るのである。天皇は皇祖皇宗以來萬世一系、『現つ神』として臣民に君臨せられると同時に、又億兆の民を代表して皇祖皇宗に仕へ、國民の崇祀する神々に民を代表して、四海の平安、五穀の豊穰、民の慶福を祈り求め、又其の收獲物を献げて之を感謝せられる。即ちユダヤ人の大祭司に似たる職

務を執掌せられるのである。全國十一萬の神社はその機關である。

最近宗教法と共に神社法制定の必要あり、目下委員を設けて専ら其の調査がなされて居る。信教の自由は憲法の保證するところ、然かも國民は皆祖宗の神々を拜するの要がある。神社は宗教にあらず、然かも國民一同の祭祀とせねばならない。

若しうまく之が出来上つたならば萬國に比なき法制として世界の驚嘆するところとなるであらう。

かやうに皇室中心の我が國體は常に政治團體でなく、社會的共同團體であり、又それは一個の教會である。我が國民が皇室を尊重することは世界の驚異であつて先年新渡戸博士は議會に於て時の首相を彈劾して、我が國が世界に誇り得る唯一のものとは之である、之に對する不謹慎は國民的大冒瀆はないと云はれたのは正當である。それはユダヤ人がエホバを瀆すと同様である（以下次號）。

エレミヤ記の研究 (三)

一一 エレミヤの聖召 (下)

江 原 萬 里

眞實の自己の發見

エレミヤの聖召は突如として彼に臨んだ。然かも其の内に彼の全生涯の意味が悉く籠つて居た。時は紀元前六百二十六年ヨシア王の治世十三年彼が二十歳に達するや達しない一青年の時であつた。

エホバの此の言ことばわれに臨みていふ、

われ汝を腹に作らぬ先に汝を知り、

母の胎を出てぬ先にわれ汝を別わかち、

萬國民の預言者として定めぬ (一・五)。

今や神は全人類に對する神の大經綸を行はんとし、預じめ之を僕なる預言者に傳へんとてエレミ

ヤを召し、彼をして萬國の運命に關する重大事を預言せしめんとし給ふたのである。それは當にユダヤ一國民のみに限らない、萬國民の運命に關する預言者として定め給ふたのである。或る人々はその餘りに大なる任務であるために此の聖召を作話とする。然れども現今に至るまで一國の存亡興廢は只其の一國だけの事として終らない。嘗て朝鮮内の惡政は日清戰役を生せしめ、次で日露戰役を招致し、更にセルビア國に起つた一事件を機として全世界の動亂の遠因となり、ドイツ、オストリアハンガリ、ロシアの三大帝國の倒壊となつた。小なるユダ一國の運命はアツシリア大帝國のそれと關連し、又その帝國に隸屬したエジプト、メジア、バビロン、其他の諸民族の休戚に關連する。それ故に神がユダの罪を罰し給ふことは當時の國際組織と世界文明系統に對する審判であり、又之が崩壊である。神が全人類の神であり、全世界

の眞の統治者であり給ふならば、ユダに在つて神の御言を宣べる預言者は又萬國民の預言者であることは少しも怪しむに足らない。

只驚くべき事は未だ年二十に達するや達しない田舎の一青年が此の聖召を聞いた事である。更に驚き怪しむ事は、此の聖召は彼が未だ生れ出ぬ前に、否、母胎にその片影だにもないその以前に、神は既に彼が生れ出でた後彼の如何なる人物となり、又如何なる能力を有するかを預じめ知り、且つ之に如何なる任務を授くべきかを預じめ確定しおき給ふたこの啓示である。

如何にして萬人を驚倒せしめるに足るかやうな自覺が青年エレミヤの心に生じたか、我らは其の神秘を知る由もない。然し乍ら何人と雖も直接神に接し、神から何らかの啓示を受けた者にはその人相應の理解がある。エレミヤは實に此の時彼自身の生存の眞意義を悟つたのである。神は彼を何

のために此の世に生れしめ、多くの人々のうちに在つて彼に如何なる役割を勤めしめ、以て神の御國の準備となさしめ給ふたかについて偉大なる永遠的事實を直覺したのであつた。即ち、自分が今まで自分をかくの如き者と認識する以上の自己、己にあらで神が己を如何に見、何に用ゐんとし給ふかの永遠的理想の自己を知つたのである。

彼は今や彼が神を知る前に既に神に知られ、彼が神に仕へる前に既に神にその任務を預定せられて居たことを知つた。彼は一度此の眞の自己を發見し、それに生きる時、今まで感じ得なかつた自分のうちに潜める新生命、新能力が顯はれて來るのを覺えた。世の人々は現在の自己以外の自己を知らずして、只其の目前の肉的幸福を追ひ、やがて凋落する數十年の生命のために何を食ひ何を衣んと思ひ煩ふ時、エレミヤは永遠の世界に在る自己を知り、その現世に於ける使命を感じたのである。

それは『エホバの御言われに臨み』だからであつた。イスラエルの宗教は國民的宗教であつて國民が一團體となつて一定の場所、一定の儀式で神を拜した時に當つて、彼はかくも個人的に神と親しき關係に立つことを得て宗教の眞髓に達したのであつた。そして神との此の直接なる經驗に照して當時の宗教の皮相と墮落とを知つた。彼の經驗により神との關係は個人的且つ靈的であらねばならない。それ故彼は常にイスラエルの民のみならず、萬國民即ち全人類の預言者として其の神に對する背戾を語らねばならなくせられたのである。彼は實に神の御言によつて自己とその天職とを知つた。又此の御言に由つて己が國民のうちに遣はされた。そして有ゆる反對と迫害のうちに在つて彼を支持したのも亦此の御言であつた。彼に臨む神の御言こそは彼が空手空拳、單獨に全世界を敵として立つた時の唯一の武器であつた。

然し乍ら何人も經驗するところであるが、生涯の或る時期に於て神から直接或る啓示を受けた事と、直ちに起つてそれに生きることは全く別である。否、一度大なる光を認めた後は以前に勝る大なる暗黒に襲はれるのを常とする。四十日四十夜の荒野の誘惑は天開け聖靈の降下後に來る。かの時見し光聞きし御聲は只一度限りであつて再び我に來らざるか。それは只一場の空しき夢であつたか。現在の自分の無力を以てどうしてその光の示したやうな自分たり得やうか等、等、等。

エレミヤの場合には常人の場合と異なり遙かに偉大なる啓示であつた。それは萬國民の預言者となる事である。人として此の程大なる名譽はない。然し乍ら少しく預言者の何者であるかを知つて、彼の心はひるまざるを得ない。神は果していつまでも此の微弱な我と偕に在し常に我に語り給ふであらうか、我は果して神に忠實であり、常に神の

御言を明に聴取し得て之を語り得るであらうか、
 一つの大きな疑惑である。更に又神と偕に在つ
 て神の言を語ることは神に背ける全世界の凡てを
 敵として立つ事である。その嘲笑迫害に耐え忍ぶ
 ことである。ユダの國の罪を責め、又全世界の運
 命を決する預言者となる程困難な任務はない。己
 果して之に堪え得るや否や。エレミヤはまだ二十
 歳前後の青年であつた。

われ云ふ、

ああ、主エホバよ、

われは語るべきことを知らず、

われは餘りに年若し（一・六）。

されどヨナと同様に一度神に捉はれて彼はそれか
 ら逃げ終はす事は不可能であつた。全然神に屈服
 するまでは神は決して追求の御手を緩るめ給はな
 い。彼は遂に神の口説に敗けた。後年彼は之を後

悔して云つた。

ああ、主よ汝は我をすかし給ひ、

我は汝にすかされまつりぬ。

汝は餘りに強く在して、

我をば遂に敗かし給ひぬ。

われは日々に物笑となり、

人皆われを愚弄すなり。

われ語る毎に恥を受け

『兇暴、無法』とわれは叫ぶ。

エホバの御言は我が不評、

ひねもす我が嘲笑となる。

若しわれ彼を思ひ出さじ、

御名をもて語らじと云はば、

我が胸のうちに燃ゆる火のごと、

我が骨のうちに閉ぢ籠もり、

抑えんとして勞れ果てつ、

黙さんとして黙し得ず（二〇・七以下）。

あゝ神に捉へられた者こそ不幸なれ、或る時は何故神の口説に乗つたかご後悔する。然かも人間の心情は、遂にそれ以上に強く、それ以上に深い神の迫力に屈服する外如何ともする事が出来ない。如何に神は彼を『すかし』給ふたか。

エホバわれに云ひ給ふ。

われは餘りに年若しと云ふ勿れ、

誰にてもわが汝を遣はす人に往き、

何にてもわが汝に命ずる事を語れ。

彼らの面を怖れる勿れ、

われ偕に在つて汝を救へば、

エホバの御言。

かくてエホバ其の手を伸ばして我が口につけて云ひ給

ふ。視よ、われ我が言を汝の口に入れぬ、

知れ、われ今日汝に任ず、

萬民の上と萬國の上に、

引抜き打ち毀ち或は滅ぼし、

又は建て或は植うることを(一・七以下)。

亡國を預見

年若きエリフは云つた『人の衷には靈あり、全能者の氣息人に聰明を與ふ。大人すべて智慧あるにあらず、老人すべて道に明きに非らず』(ヨブ記三二・八)と。語る言にしてそれが、若し神の御言であつたならば、萬人擧つて否定しても眞理は眞理である。天地は過ぎ往くもその言は必ず成就する。萬民の上と萬國の上に或はそれを破壊し、或はそれを建設する。今や神が青年エレミヤを捉へて神の御言をその口に入れ之を語らしめんとし給ふたのである。エレミヤは抗し難き御力に強制せられて別人の如くに起ち上つた。

彼は何かしら己が心のうちに異常の力を感ずるやうになつた。彼の眼光は自然と人生の奥底に透徹し、其の真相を究むるやうになつた。常人の見し日常茶飯の事柄とするそのうちに神の御言を聽

き、神の御手の働きを観る。小なる自己は全世界に懸り、心中には雄大なる思想が湧き出づる。さらば此の大思想は如何にして現實の世界に行はれ、神の御言は如何にして單に言に留まらず、事實として眼のあたりに實現するであらうか。彼自身は無力であつて只之を語る外に何等の實現力を有しない。エレミヤは此の事を深く沈思しつゝ或る日冬枯の野を歩んで居た時、大地は凍り、自然は冬の猛威に壓せられて樹葉は凋落し、萬物は死せるがごとくに眠つて居るその唯中に、彼は圖らずも一朵の扁桃アマンドウが春の先驅として咲き盛かつて居るのを見た。忽ち彼は神の御言に接した。

かくてエホバの言我に臨みて云ふ『エレミヤよ、汝何を見てありや』。われ答へぬ『われは目醒(扁桃)の樹の枝を見てあり』と。爰に於てエホバわれに云ひ給へり『善くぞなんぢ見たり。そはわれ我が言を行はんとして目醒の居ればなり』(一・一一以下)。

扁桃アマンドウ

扁桃はヘブル語でシェーケードと云ひ、目醒め、注目を意味する、故に目醒の樹と譯すべきである。エレミヤは之を見て神は今やその御言を實現せしめんとてシェーケード目醒めて居給ふ事を感じたのである。それは駄洒落ではない。彼は天然を通じて神の御心を讀んだのである。萬物眠るが如き嚴冬の野に獨り神は目醒めて働き給ふ。その神は我らの靈魂を主宰し、又全世界を支配し給ふ神である。此の神が少しも眠み給はず、今や速にその御言を實行し給はんとしつゝあるこの示しである。若し神は目醒めて必ずその御言を實現し給ふならば、如何なる形に由つて實現されるであらうか。彼は或る日不圖臺所のかまごの下の火が北風に煽られて盛んに燃え上り、その上に懸つて居た鍋が沸き立つて居るのを見た。

エホバの言再び我に臨みて云ふ『汝何を見てありや』。われ答ふ『沸騰ふたぎたる鍋なり、その口は北より此方に向ふ』

と、爰にエホバ我に云ひ給ふ。

北の方より禍沸き立ち、

此地に住む者凡てに注がん。

そは視よ我れ北の諸國を、

皆呼寄せつつあればなり。

彼ら來つて各々其の座を、

エルサレムの城門の入口と、

城の周圍の石垣と、

ユダ國中の邑々に設けん。

彼等を用ゐてわが審判を、

我を棄てて他し神に香をたき、

己の手にて作りし物を拜む、

諸人の惡の上に宜ぶべし（一・二三以下）。

エレミヤは臺所の鍋が北風にあふられて南方に溢れ出るのを見て、北方から諸國人が攻め寄せ來り、ユダの國は滅亡する事を直感した。今や天地は眞冬、萬物眠る如く、ユダにはアツシリア帝國の脅威去り、人々平和繁榮の春の來るのを期待し

て居るにも拘はらず、神は目醒めて大なる眼を見開き、この民の背ける罪を罰するため北より禍を招き寄せ給はんとすとの啓示である。エレミヤは之を預言することを命せられたのである。

此の時以來彼は全世界を敵としてその罪を糾弾し、神からの刑罰の到來することを預言せねばならない。山をなす大なる波瀾は、今やユダ國を襲ひ來らんとし、都も王宮も神殿も又國中の田畑も悉く呑み去らうとして居る。彼はその渦卷の最中に躍り込み、自ら此の災禍の苦杯をその殘滓までも満喫しなければならなかつた。

汝腰に帶して起ち上り、

わが汝に命ずる事を語れ。

彼らの面前に挫ける勿れ、

汝挫けなば我汝を挫かん（一・二七以下）。

その性質輕卒で思慮なく、思ふことは直ぐ口に

又動作に顯はし、度々失策を演じ誘惑に陥つたシモンはイエスにつき従つた最初の日に『汝はケバ釋けはベテロ即ち大磐石と稱へらるべし』(ヨハネ傳二・四二)と己が性質に似ても似つかぬ名を頂いた。そして神に召されて彼は實に巖となつた。丁度そのやうに性來婦人の如き孱弱の感情を有し、内氣であつて、物におじ、引込思案で人前に出づることすら厭ふ若者は、神に召されて己が天性と正反對の性格と任務とを授けられたのである。

知れ、われ今日汝を立てて、

堅き城、銅の壁とし、

王たち、ユダの牧伯たち、

祭司と國中の民に向はしむ。

彼ら汝と争うとも勝を得じ、

汝と偕に在りてわれ救へば、

エホバの御言(一・一八以下)。

彼がユダの罪を糾弾し、亡國を預言するや『王

たちユダの牧伯たち祭司たち』全國民悉く之に反對した。彼は己につける何の勢力なく背景なく只彼と偕に在し給ふ神に由つて立ち、彼の心に語り給ふ神の御言を唯一の武器として之に向つたのである。そして神に由つて立てられて堅城鐵壁となり、彼の預言は事實として現はれ、都は陥り、神殿は廢墟となり、民は異境につれゆかれ、國土は荒蕪に委せられた。實に彼は此の大混亂大破壊を前にして『或は引抜き打ち毀ち又滅ぼす』權能を與へられたのであつた。人々皆神の在し給ふことを忘れ、政治に經濟に社會に家庭に各々己がじし勝手を振舞ひつゝあつた時、扁桃の花に早くも時の徴を知り、神は目醒めて働きつゝあり給ふことを感じたエレミヤの預言は成り、かくして神を忘れたる者に降る神の刑罰の如何に嚴肅であるかは示された。

然し乍ら、かく罪を罰し、國を滅ぼし、悲惨な

る災禍を降し給ふ者が常に目醒めて働き給ふ神であつて盲目なる運命、器械的物力、自然的偶然でないならば、その神には『又建て或は植うることを』なし給ふ能力がある。萬物悉く神の御手のうちに在ることは罪人には恐ろしい事であるが、又罪人の希望でもある。エレミヤが己が愛する同胞の悲惨、愛する國の滅亡を預言しつゝ常に此の信頼を『汝と偕に在りてわれ救へば』と言ひ給へる神に懸けたればこそ、内氣にして物おじする若者は毅然として『腰に帶して起ち上り』大暴風雨大洪水の眞唯中に飛び込み得たのである。

されど神の代言人として愛する同胞の罪を暴露し之を糾弾し、愛する國の滅亡を語る程彼につらい事はなかつた。彼の性情は人なつこく争を好まず平和を愛した。然かも神に強ゐられて預言者となり之等を悉く己が敵として戦ひ、自らは孤獨窮乏迫害を受けなければならなかつた。之がため彼

は己が生れ出し事を誼つた。此の人間エレミヤと神の預言者エレミヤとの内心の闘争は彼をして益益同胞より孤獨ならしめ、益々神に接近せしめ、遂に彼の宗教が當時の社會的儀制的宗教より脱して個人的靈的全人類的宗教たらしめ、そしてこの敬虔が亡國の彼方に生き延びて遂にイスラエルの民を再建する原動力となつたのである。

私が無教會主義を唱へないこと云ふと無教會主義を唱へる或者が『公的提携』を中止すると云つて來た。私は『公的提携』の何であるかを知らない。そんなものを約束した覺がない。無教會主義もいよいよ黨派化しかつたらしい。嘆すべし。

三 農村の宗教的墮落 (上)

信仰と科學的認識

エレミヤは神に召されて萬國民の預言者となり、先づ彼はユダの罪を罰するため神は北から禍を招き寄せ己が國を滅ぼし給ふであらうと云ふ事を己が國人に預言せねばならなかつた。人々は皆平和の曙光を見、無事安泰を云ふ時、彼は唯獨り國民的信念に反し、神から直接の啓示に由つて大なる災禍の到來すべき事を告げねばならなかつた。彼は此の異常なる啓示に接して、神の眼を以て己が國の宗教及び社會の状態を仔細に見直した。彼は元から宗教上の虚偽と社會の罪惡とに對して敏感な良心を有した。かやうな敏感な良心を有したればこそ彼は神から特別の啓示を受け得たのである。然かも此の啓示に接して彼の良心は益々敏感となり、彼の眼光は當時の宗教と社會の状態の過去及

現在の奥底に透徹し、其の國民的宗教と社會生活との將來は唯滅亡以外にない事を確信するに至つたのである。

若し何人かゞ我日本國の國家觀念及びその社會制度は虚偽の上に立つの故を以て將來只崩壞滅亡あるのみとの啓示を眞の神から受けた者があつたと假定せよ、彼は愕然として今一度、仔細に我國の狀態を永遠の相、神の立場から見直はすであらう、そして其の内に潜める怖るべき罪惡と神に對する不義の事實を今更に發見して驚くであらう。神は今も尙全世界の人類を支配し、其の歴史を指導し給ひつゝある。我國と東洋諸國の將來如何、或は再び人類の間に大戦争が生じ又現文明が崩壞するかどうか。之皆神の攝理の御手に在る。只恨らくは眞の預言者出で、神の立場から歴史を解釋し、之を我等に示す者のないことを。

エレミヤは今や眞の預言者として全世界の諸國

民の歴史を支配し給ふ神の直接の啓示に基いて、己が國の宗教及び道德状態を仔細に視察し、その滅亡の必然を確信するに至つたのである。此の事は先入の觀念により、又はアプリオリの理論からして、それに適するやうな材料のみを集めて作つた我田引水的の結論ではなかつた。

由來或る一つの主義を奉ずる者は、宗教家に限らず、冷靜に客觀的に事物を観察することを己が任務とする學者すら、動もすれば既成の理論に捉はれて知らず知らず、それに都合のよい材料のみを集めて豫定の結論を作るの過誤に陥る者が多い。然るに眞の信仰を有する者に反つて此の弊が少ないのを見る。彼等は一つの主義を奉ずる學者よりも冷靜であり、客觀的であり、事物の觀察判斷が公平であり得る。之彼等は神から直接に啓示を受け、學説の如何に關はらずそれを眞理と確信して居る者である。それ故に強めて附會をしない。そ

れと同時に全く自己の好惡に捉はれず、神は果して現實に其の啓示を實現せしめ給ひつゝありや否やを、冷靜に、純客觀的立場から觀察する事に興味を感ずる。之眞の信仰が純正科學の發達を妨碍せず、却つて之を促進する理である。從來學問の發達を妨碍したものは眞信仰ではない、世俗化した教會であつた。

イスラエルの眞の預言者たちのうちエレミヤ程民衆の心の奥底にまで徹して之に同情し、其の根源に遡つて其の宗教心を分析し、事實に即してその虚妄を明にした者は他になかつた。彼は實に舊約時代の最も優れた宗教心理學者であつた。どうして彼がかく迄に徹底的に民衆の宗教心を觀察し、之を分析し、其の虚偽を批判し得たかと云ふに、それは彼自身常に神と親しく相接して、眞の宗教の如何なるものであらねばならないかを、彼自身の經驗に照して明白に知つたからである。凡そ宗教

が各個人の神との直接の交通から生ぜずして、只外からなる説教、教義、儀式、教會政治によつて維持せらるる時、それは其の時代時代の社會關係に左右せられ、虚偽となり易い。エレミヤは自己が眞實に、且つ直接に、神と相交る其の經驗よりして當時の民衆の宗教を批判した。されば眞の『神の人』は當時の宗教状態をどう見たか、こゝに彼の初期の預言に特別の興味がある。

農村の墮落

當時ユダの首都エルサレムには我國の伊勢の大神宮以上に神聖視せられた神殿あり、祭司以下百官有司諸民爰に集り盛大なる祭事が舉行せられた。此の祭事が即ち一國の政治であつた。さればエルサレムに於ける宗教は官僚的宗教である。然るに地方に於ける宗教は之と異なつて民衆的であり、宛かも我國の高山には祠あり、又各田舎の森には

鎮守の社があるやうに『すべての高さ山と諸ての青木の下に』(二・二〇)又『もろくの童山』(三・二四)の上に石にて築き又木を建てた祭壇があつて村民はこゝで神を祀つた。其の年中行事である祭禮は田舎の人々の唯一の樂みであつて神樂は鳴り響き、舞樂は奏せられ、祭の終つても夜もすがら民衆は歡樂に耽けつた。此の祭事こそ民衆の心の奥底に在る、神に對する見えざる靈的狀態の外への表れであつた。エレミヤは民の此の外なる宗教からして、彼等の内なる神との靈的關係の不義を洞察したのである。

エレミヤの初期の預言の特色は彼の先驅者ホゼヤと其の思想と用語とを同じくした事に在る。彼はイスラエルの民を人格化して一體とし、之と神との關係を夫婦關係に喩へた。そしてエレミヤは民の墮落によつて神との間が義しい倫理關係にない事を認め、其の墮落の原因を其の起原に遡つ

て深刻に分析批判したのである。

抑もイスラエルの神エホバは全世界に唯一絶対の神である。然し乍らホゼヤもエレミヤも神を言ひ表はすにかやうな内容のない哲學的言辭を以てしなかつた。彼等が感じた神は現實の神であり、特別の人格あり、其の内容豊かに獨自の存在であつた。エホバは特別の性格を有し給ひ、諸國民の拜する神々と全く異つて偉大にして崇高、其の御前に人々はひれ伏し己れ全部を献げて絶対に服従する外はない存在であつた。エホバは又その民に之を要求し給ふ神であつた。エホバの性格が諸國民の拜する神々と全く異なる崇高偉大であるだけ、その民に要求し給ふところも亦獨特のものであつて、宛も特定の夫が其の妻に對して妻の全心全靈全身を要求する如く、エホバはその民に心からなる全歸服を要求し給うた。其の要求がイスラエルの民との契約、即ちモーセの律法であつた。

神が獨自の神であり獨特の人格を有し給ひ、その民に對する要求が又獨特の倫理的性質を帯びたため、之に服従する限りイスラエルの民は全世界の諸民族中獨自の存在を有し、神に由つて其の靈的及び肉的生活を支持され、限りなき祝福を受けたのである。即ち民は妻が夫に對する如き渾身の熱情と献身とを以てエホバに仕へる限り、彼らは國民的存在と繁榮とを續け得た。彼らが其の始めエホバに導かれてエジプトを脱出し、曠野に於て神と契りをなした時はそれであつた。彼等のエホバに對する愛情は濃厚であり、彼らの貞操は律法を嚴守し得しめた。實に神と民との間の愛情の深かつた事は新郎と新婦のその如くあつた。

然るに此の花嫁がエホバに導かれて曠野を通過し、一度乳と蜜との流れるカナンの菜園に入るや、其の土地の夫（バールム）である偶像を慕ひ、之と姦淫し、彼の女の眞の夫であるエホバに背き之

を棄て去つたのである。エホバは宣ふ(以下第二章)。

二 我は記憶ゆ若き日のなが真情、
契りし時のなが愛を。

曠野の中を横切りて、
種蒔かぬ地を従ひ來ぬ。

四 聽けヤコブの家よエホバの御言、

イスラエルのもろもろの族よ、
何の不義をばなが父祖は、
我に見出して我を去りゆき、
虚しき風に追ひ従ひ、
虚しき風となり果てたる。

七 我なんぢらを菜園に導き、

其の實と佳物とを食はせしに、
其處に入るや我が地を瀆し、
我が嗣業をば憎惡としぬ。

八 祭司たちは云はず、

エホバは何處に在すやと。

律法を掌る者我を知らず、

牧者は我に背き去り、

バアルに由りて預言者は語り、

無益のものに従ひゆけり。

『種蒔かぬ地』なる曠野に於て牧畜を業として約四十年を過したイスラエルの民が、神の御手に導かれてカナン『菜園』に入つた時、彼らは其處に既に先住民族が土地を耕して農業を營み、彼等よりも遙かに高度の文化生活をして居るのを見た。彼等が其の中に入り之と隣接して生活するとき、その生活態様を模倣し、牧畜をやめ彼等から耕作の方法を見習つて農業に従事する者が多數に生じたのは自然の成行であつた。(本誌四十五號イスラエルの民の背反參照)

然るに彼等の先住民族にはその民族の信奉した

カナンの土地の守護神であり、其の主人である神があつた。此の神は自然の生産力を表徴したものであつて、土地から生ずる穀物や果實の成育増殖は皆この神の業とせられた。この神は天から雨を降らせ、地に水を流れしめ、地は生命の水を受入れて萬物を産む。それ故この神は又土地の夫（バリアム）であつた。カナンの先住民族が此の農業に従事する事と此の神を祀る事は切つても切れぬ關係があつたのである。

加之此の神は自然の生殖力を表徴する神であつたからその祭事は甚だ肉感的であり、その樂しさ愉快さは、嚴格なる道德律たるモーセの十誡を以てしなければならぬ、イスラエルの神エホバに仕へるの比ではなかつた。さればイスラエルの民がカナンに入り、牧畜を廢して農業に従事する者多數となつた時、彼らは曠野に於て契ちぎりをなし、眞情を吐露し懇切に仕へ奉つた、その夫である道德

の神エホバを棄て、カナンの土地の夫なるバアルを戀ひ慕つたのである。ホゼヤ書は之につき語るどころ最も詳しい。

かれ（イスラエルの民）いへる言あり、我はわが戀人等につきしたがはん、彼らはわがバン、わが水、わが羊の毛、わが麻、わが油、わが飲物なきを我に與ふるなりと。……彼が得る穀物と酒と油はわが（エホバ）與ふるところ、彼がバアルのために用ゐたる金銀はわが彼に増し與へたるところなるを彼はしらざるなり（ホゼヤ書二・五以下）

イスラエルの民は、靈にして且つ道德的であり給ふ眞の神を棄て、自然の生産力を神として拜し、その肉的幸福の豊かさを願つたのである。彼等は先づエホバと其の義しきを求めず、何を食ひ何を衣んことを思煩つて、盲目なる自然的生命力を神として拜したのである。丁度農業時代から工業時代に入つて、現代人が此の自然にすら背いて物的機械力を神として拜し、『彼らはわがバン、

わが油、わが飲物などを我に與ふるなり』と云ひつゝあるのと同じ心である。マルクスの社會觀はその最も顯著なものである。

イスラエルの民が自然の生産力を神として拜するに及び、人間の靈魂は自然以下のものとなり、靈性の發達はやみ、只動物的肉慾の満足以上に崇き目的はなくなつた。その生命は現世に限り、不老長壽、一家繁榮、子孫増加、收入豊富、無病息災、日夜あらん限りの歡樂に耽ける事が人間の至上善となつたのである。彼等の靈魂は活ける眞の神から離れて瘦せ衰へ、人間の内に潜める全能力を發揮せしめる靈的生命は枯渴して、バアルを慕ひ、『虚しき風(バアル)に追ひ従ひ、彼等自身虚しき風となり果て』て最早イスラエルの民の獨自の存在の意義なく、力なく、大なる希望は失せ、國民的生命は涸渴した。之彼等をして獨自の民たらしめるエホバを棄てたからである。

國民的生命の枯渴

何處にか他の民族は己が神を他の神と取替へた者があらうか。遠く西方地中海より東はアラビアの沙漠の彼方まで探し求めて見よ、

九さらば汝らと今争ひ、

汝らの子らと争ふ。

一〇キプロスの島々まで渡りて見よ、

ケダルにまでも使を遣りて調べよ、

一一己が神々を取替へたる民ありやと、

その神々は眞の神にあらぬに。

異邦の民の拜する神々は空虚無力なる偶像である。それに拘はらず、彼等はそれを捨て、他の偶像と取替へない誠實があるではないか。

さるを我が民はその光榮を

無益の者と取替へたり。

イスラエルの民は眞の神を全世界の人々に示すために選ばれた者であるに、其の光榮なる神を棄て其の天職を抛つて之に背き、益なきバアルに従つて其の民族的獨自性を失ひ、其の存在は全く益なき者（バアルの語義即ち氣息、空虚従つて無益）となつたとはこんな不思議が又ごあらうか。エレミヤの如く自己の日常生活に、いつも神と親しき交をなした者には、民衆が眞の神を棄て、眞の神を知らず、偶像を神として拜し、之に仕へることは不可思議でたまらなかつた。丁度その反對に神を知らない現代人には基督者が熱心に神に仕へることを不思議とするやうに。

バアルは前にも述べたやうに土地の夫として見られ、天から雨降り來て地に流れて地を潤ほし、それに由つて地は生物を産む、自然の繁殖力の表徴であつた。バアルには陰陽の理あり、男女兩性の結婚の理を以て土地の豊穰、産物の増殖、人間

の生活の幸福の原因とした。嘗にそればかりでない。バアルからの生命はバアルを祀る聖所に奉仕する巫女との性的交際に由つて各人之を享受し得る者ごされた。此の一事を以て見てもバアル崇拜が如何に社會の基礎である家庭の神聖を瀆し、國民生活の根本を破壊したかご明かである。バアルを祭る儀式が如何に肉感的であり、『肉慾の熱に驅られ、情に浮かされ、風にあえぐ』『若き牝牛』たちによつて行はれたか。神の民イスラエルの背信こそは天地共に驚愕、慨嘆、戰慄に價する。

一 二 ああ天よ此の事にあきれ、
驚き且つ慄へあがれよ。

一 三 二つの悪事を我が民はなしぬ、

活ける水の泉なる、

我を彼らは棄て去りて、

己れ自ら水溜を堀りぬ。

そはひび破れて、
水保ち得ぬ水溜なり。

我等の靈魂が活ける神より混々として湧き出づる永遠の泉の水を汲みて飲みてこそ永遠に生きるのである。我等の靈魂はその拜する者と同じ性質を受ける。されば若しその創造主なる眞の神を拜せず、自己を拜し、又は己が創造した物を拜するとき永遠の生命を失ふ。自然の生産力を拜せば動物に墮落し、物的機械力を拜せば機械に化する。

『これ（偶像）をつくる者ごこれに依頼むものごは皆これ（偶像）に等しからん』（詩一五篇八）である。此等のものからして人間の眞生命は來らない。眞の幸福、高められたる思想、潜める諸能力の自由なる發達、平和光明永遠の歡喜は生じない。只生命の泉なるエホバより來る。エホバの如何なる神なるかを知り、其の求め給ふところに適ふやう我等の全心全靈全體をもつて之に仕へ奉る時に來る。

かくしてこそ始めて神の民としての光榮あり、その天職は全くせられるのである。

然るに彼等はその存在の基礎、國民的生命の本源であるエホバに背き、自己の智慧と能力に由つて其の精神的及肉的生活を維持しやうとした時、彼等は直ちに己が智慧と能力の不足を感じ、之を補ふために外國の文化に依屬する外はなかつたのである。神よりの生命の泉を汲まない者は必らず他人の水を求めてその獨立を喪ふ。

一八 されば汝エジプト路を、

ナイルの水を飲まんとて往き、

又大河の水を飲まんとして、

アッシリア路に往くは何事ぞ。

柏 木 通 信 (第十一信)

齋 藤 宗 次 郎

史杖の迹を辿りて

杖を曳き垂る穂の圃の畔道に

天國を偲ぶ秋の夕暮

内村先生は北海道の處女林下、アマスト大學の校外、比叡山麓等の逍遙に止らず、各地傳道の間にも、必ず幾許かの時間を割いて、其周辺の山に岡に森に田圃に杖を曳き大自然の懷に投ぜられた。ベートーベンの壯嚴なる音曲ホキットマンの卓偉なる文詞、先生の至純にして獨立自由なる信仰は、何れも散策と切り離して考ふことは出來ない。渠等は其處に於て特別なる恩恵として天のインスピレーションに接したに相違ない。先生の散歩は大抵の場合殆んど獨りであつた。然し幸にも余は數回其歩みに加はることを許された經驗がある。其時に發せられた質問と物語とは何れも人生の大問題であつた。之によつて先生が獨神と偕に綠蔭を辿り芝草を踏みつゝ、靈魂に享けし恵みの如何に尊きものであつたかを想像することが出来る。前掲の詠草を誦んでも、略々其事を察知せらるゝのである。

東京郊外の變化發展は實に驚くばかりである。二三十年前を偲ぶ目標の残れる間にと思ふて、或る日恩師史杖の迹を辿つて見た。故老の言を頭に泛べて現在を超越せる觀察であつた。成る程範圍も廣く個所も多い。祈禱默想讀書に好適地ミして興へられた角筈、柏木が、斯くも豊富なる散策の樂園を以て圍まれたのは決して偶然でない。

樺林を負ふ角筈の丘は四方一帯何處に向つても綠葉飄り禽鳥囀つる散歩地であつた。眼前に連る東面の廣き茶畑の朝露を煌めかし白花を匂はず邊より順次常盤木の杜、淨水場の芝原、梅屋敷、十二社の森、常圓寺下の水田、幾筋かの並木、恩師は其間を幾回往返せられしか知れない。東方數町の所に戸山ヶ原がある。草原の北境なる雜木の茂林を「祈禱の森」と名けられしを以て察すれば、原頭既に訓練の兵士も嬉戲の兒女も去つて、夕陽富士の雲裳を彩る頃、屢々此木影に佇んで基督の爲め國の爲めに熱き祈を捧げられたであらう。楮土を踐んで盆地に下り、危橋を渡つて東中野の高臺に登る。此處は當時名高き華州園である。古松を盟主に檜檜竊其他無數の花弁之を圍みて清爽の氣人に逼る。懸崖に立つて下瞰すれば、神田上水の流域は稻穂既に熟し、黄金の波を漂はして戸塚方面に及ぶ。道を西方に取

つて原を稱する高原的林野の突端なる水川神社に至る。境内杉の老樹多く幽邃閑寂の別天地たるを失はない。石壇を下りて小川を越え、尙も進めば塔の山に達する。頽廢せる堂塔伽藍の跡淋しけれど、徐ろに老杉の樹下を徘徊する時に神氣清澄を促し來るを覺ゆる。歩を轉じ、井の頭、善福寺の兩池を水源とせる河の流れに沿うて下ること數町、既に目差す所を一周し了つて蜀江山の林外に足を蹕め、恩師曳杖の跡を顧れば、人家點々、起伏多き武藏野に未だ傷けられざる天然の地表を飾るありて、朝霞、暮靄、松籟、鳥語の親しむべきもの多きを觀る。但し是れ二十年前の光景である。立ち並ぶ巨大の櫛を右に仰ぎ、鎧神社の公孫樹を左に眺めて圓照寺坂を上れば、程なく恩師邸なるヒマラヤ杉の友を迎ふる様なるに遭ふ。一里の行程を巡り來りて感慨甚だ深し。

日曜日の集會

一、與奪の恩恵に對する信者の態度

齋 藤

エホバ與へエホバ取り給ふなりエホバの御名は讃むべきかな。父の御心を知るものは潔く奪はれ素直に受く。神はヨリ善きものを與へんが爲に、屢々堅く保持するものを突如として奪ひ給ふ。我等は常に與奪の神に對して絶對從順の態度に居らねばならぬ。ヨブと恩師の例を擧げて語つた。

一、腓立比書の梗概

小 栗

馬太傳より順次十回ほき講演し來り此書に至りてキリストの恩恵に對する感謝歡喜絶頂に達せるもの、如くてあつた。パウロの獄中よりの辭世とも見るべき彼の奪き實驗、碎けたる心、滴る愛を強き感激の語調を以て述べた。

一、信仰と行爲

永 井

信仰の奧義を教ふる加拉太書を取つて信仰と行との密接なる關係を諄々と説いた。

一、戰爭に就て

藤 本

戰爭（又は階級鬭爭）は罪惡なりとの感を持つに至りし歴史と、イエスの之に就ての根本精神を示し、審きは悉く主に委ねまつり、我等は只十字架の赦免に預りて謙遜つて聖旨顯現の日を待つべきであると教へられた。

石原聖書研究會

夙に陣を北郊に構へて靜かに聖書の眞理を探り、集ひ來る教友と共に其恵みを味ひつ、ある此研究會は、見る間に講堂の新築成りて、九月第二日曜日より

哥林多前書の研究を始めしと聞く。市の内外に於て各々與へられたる分を死守して基督に忠なる諸勇士に謝す。

洗足會例會

九月廿四日午後三時多摩川沿岸の農作地を一眸の下に眺め得る名古屋氏新邸に開く、會する者十名。

○動機悪ければ神學校に學んでも、傳道をしても多くは遂に墮落し去る。○静岡、京都、長野、新潟等を旅して、先生の説かれし純福音の信仰は到る所に實を結びつゝあるを目撃して感謝す。○福音の種子を播かれし我等の心田には神道、佛教、儒教、武士道、歐米の教會的基督教、マルクスの經濟思想等が潜伏して不知不識の間に荆棘の如き誘惑防害をなすを看破するの必要。○神の召を蒙る事なく、只或る種の成功を夢みて傳道に従事する事の危険罪惡。○神の聖旨の成就の爲に生命を獻ぐるは大なる幸福なりと示されて、愛兒を失ひし悲嘆消ゆ。○此世の事件事變に注目する時に不安と失望とあれど、十字架を仰げば希望湧いて平安に歸る。○我子を鞭ちて神の御心を悟りし實驗等有益なる感話があつた。祈と讚美とに力を籠め、晚餐を共にして後散會。

二名の珍客 一人は東北花巻に在りてキリストと偕に勤勞する朴澤^{はらさわ}巡查。命を受けて横須賀に開かるゝ某會議に赴く途上柏木に來り、恩師の書齋に積み重ねたる一萬に近き全集の原稿の前に、畏敬沈思、歡喜の胸を抱へて肅かに去つた。他の一人は七十三齡の荒城老姉。嬰鏢として來り莞爾として語る。未來を洞見する瞳は光を放つ。恩師夫人に會ふて積る謝恩の思を呈して後、余に向つて健康を祝し何う

ぞ全集の爲に私の分まで働いて下さいお願ひ致しますと繰り返して立關を立ち去つた。こんな光景のみを見聞して居ると人の世の荒ぶる浪は早や鎮まり返つたのかと思はれる。地方雜信 一、石見より羽後寒風山に至る北日本は概して福音に浴すること未だ甚だ薄き觀がある。其中にあつて越後のみは、夙に特筆すべき恩惠の事實に富んで居る。新潟市に於ける柱石は大橋正吉老兄である。些の胡麻化しを許さぬ信仰生活を營みつゝ、商業に従事すること三十年、先年來信濃川護岸工事の監督に赴ける青山教兄も加はりて、日曜日毎に獨立自由の清き集會を開き居るは眞に頼母しきことである。大鹿の里は木村、本望の二人指導の任に當り、患難の尊き歴史を背負ひて迫害試誘に微動だもせぬ固き信仰の歩みを保つて居る。其他村松、長岡、柏崎等も小さきながら夫々使命を守る教友の陣營がある。

二、伊豆三島町は屢々地震ふ。然し永劫に震はぬ礎の上に築かるゝ神の教會あるは感謝すべきことである。技巧なき純福音に立つ本田、井戸川姉等の集會は地方にあつて特色多きものである。各家庭を順番に廻り、常に言葉によりて勵まされ、慰められ、強められ居るといふは何たる恩寵何たる幸福であらう。み榮えの爲に長く健在なれと祈る。

祖父の書翰(二)

江 原 萬 里

前月號を書いた後、私は祖父の遺稿全部を通覽したが、遂に彼の計畫した藩の財政救済策の如何なるものであつたかを知ることは出来なかつた。然るに偶々此の救済案を世子森忠弘に進言した前年のこと、安政の大地震にて江戸の藩邸が多額の損傷を受けた時、彼が國老に上書した財政改革論の長文一篇を見出した。私は僅か二十二歳の茶坊主が家老に上るものとして、その立論の堂々、思慮の緻密、言辭の雄渾に驚いた。

書中彼は執政者の心得を論じて、一國に相たる者は虚心坦懐、廣く善言を求め、下よりの進言と雖も事苟しくも道理に適ふ時は取り、適はざる時は棄て、位置によつて之を阻止すべからざる事を言ひ、殊に私心を去り、生命を獻けて君に仕へ、當路の者互に協心戮力すべき事を述べて云ふ。執事には右様の事兼て御承知有之故萬事其の宜を得られ候。猶此上乍ら毀譽黜陟は格別、生死も毛頭御心に掛られず、社稷の爲め、庶民の爲め、教諭丁寧、感動發憤、勵精治を圖る様、殿様此上乍ら遊せられ、下民愈々御仁

徳を奉仰候様奉祈候。則ち右は折檻曳袂の忠諫に有之、尤も是は小臣の事と申せ共、大臣にも間々有之候。要は諫爭教導、百方手段、臨機應變可然と奉存候。何分にも一毫の私慾有之候時は棄命取義の事なごは姑く指置き、善も惡に見え、非も是と思ひ、胸中不定、萬事混亂を致し候。扱又千丈の坡も蟻壤より崩ると申譬の通り、百萬騎の中に只一人異心の者有之候ても必敗の試有之候得ば幾重にも教誨を加へられ納得せしめ、御大人一統一致和睦、御謀議成され候事簡妥と存奉候。

當時藩に二黨對立して黨爭絶えず、藩主は軟弱にして女色に溺れ、藩政は甚だ振はなかつた。是此の言がある所以である。然るに此の上書に於て改革事項として進言した肝心の個所は遺稿中には削除してあり、且つ左の書入がある。此邊右六ヶ條書有之候者なれ共、已に御施行に相成、且熟々相考候處時勢の不可も有之、何分未だ學問不足、胸次狹隘故、後悔慚愧仕り、右等の言を相遺し申候ては返て不忠且つ臣子の所不忍、旁以て削黜仕候。之はいつ削除したものかは知れないが、此の上書後一ヶ年を経て進言した財政救済策は更に一段の熟考を爲して成つたものに相違ない。此の計畫に參與した者は國老森主税

及び年寄森續之丞の二人で鳩首極祕裡に計畫を進めた。

之がため祖父は其の翌年即ち二十四歳の時、一先づ歸國し、茶道職の辭任と遊學とを願出た。然るに祖父に豫てより心よからぬ反對派が之を阻止した爲め許可せられなかつた。爰に於て隱居を願出で致仕して大阪に出て、更に一應遊學の名目を全くするため再び江戸に出た。偶々頼みとする世子忠弘病死し、計畫に大なる齟齬を生じたが、忠弘の遺言により直ちに藩主に召出され、異數の拔擢を受けて勅定奉行となり、藩の財政改革の衝に當らされた。

然るに藩主は輕卒にも國老森主税及び反對派の領袖村上眞輔の兩人を除外したため、彼等は内應者により之を知つて憤激し、直ちに江戸に出て藩主に強硬なる談判をなし、遂に改革を取止めしめた。如何に當面の責任者たる續之丞が此の時卑怯であつたか、如何に藩主が軟弱であつたか。祖父が財政改革の第一着手として先づ藩主自身の嬖妾を廢すべき事を進言したため、藩主の心一變し、藩の大事に當り祖父を見殺しにし、反對派の憎惡は悉く祖父一人の上落到下したか。此の時の事情は後掲ぐべき祖父の森續之丞に與へた書翰に詳しい。かくて祖父は免職、歸國、謹慎、遂に追放の命を受けた。祖父は身に毫も疚しさを感じざればと

て堂々と槍を立てて赤穂町を退去したさうである。

赤穂藩の財政改革は物の美事に黨争の犠牲にされて仕舞つた。財政は益々窮乏して藩内の黨争も亦益々激烈となつた。遂に四年後足輕等十三人が激昂して國老森主税及び用人村上眞輔を斬殺し、藩政は益々混亂した。更に村上の子等は十三人の舉に同意した祖父の姉婿野上鹿之助を暗殺し、明治四年彼等七人は高野山に於て十三人中の殘存者を悉く殺すに至つた。爲政者の無責任と黨争の弊害を知らうとするものには絶好の資料である。祖父が或る者から十三人の黒幕と邪推されたのも此等の事情に基いた。

祖父は赤穂町を追放さるや大阪に出て、儒藤澤東暎（南岳の父）を頼つて衣食の道を講じやうとしたが、村上眞輔の子河原駱之輔より書狀あり、祖父を奸惡の者と讒言したため東暎は彼を助けず、已を得ず再び江戸に至り鹽谷岩陰の門に入つた。ここでも亦村上一派の者が彼を離間しやうとしたが、岩陰は祖父を信ずる事篤く、彼等は目的を達しなかつた。後東暎に書を贈つて此の事を述べて云ふ。

謹責を蒙つて郷里に歸へり、又數月にして遂に放逐に遇ふ。乃ち去つて浪華に到り……先生を訪ひ刺を通ず。先生遽しく出て、寅の右袂をとつて東隣に入る。日ころ既

に足下の放逐を聞き我れ誠に悲しむ。然れども今坐中偶々某氏有り、ともに相對せば恐らくは足下の禍に累せられん。我れ時を以て足下を招き爲めに將來を謀らん。今は則ち去れと。……客舎寂寞獨り先生の命を待つこと數月、竟に一介の使なし。……寅幼より衆譽群議を顧みずして其の身を敝邑に穢ぼさんと欲する者、是人臣の微衷にして名を爲すに非ずと雖も亦知を一君子に求めんとする也。然り而して先生に容らる、其の頼む所は豈特に小人の財利、貴人の富貴ならんや。……今頼む所の人復頼む可からず、期すべきの事復期す可からず。……悲悼憂困是に於てか極れり。中ごろ疑ひしは此也。寅既に坂府の住み難きを知り、乃ち復江都に往く。到れば鹽谷氏示すに某氏の奉る所の手書を以てす。是豫じめ寅を阻む者なり。寅承けて之を讀む。曰く某生放逐は姦邪を以て也。今已に郷を去る、當に必らず門下に依るべし。先生怜にして絶つに忍びずば必ず門下の羞恥とならん。窃に先生の爲めに之を憂ふと。寅泣て曰く噫已む。姦謀縫密此に至る也。廼ち備さに坂府の事を云ふ。鹽谷氏曰く某氏の肺肝は我其の初見に洞視せり。即ち此の言有るも怪しむに足らざる也。獨り東畷先生は然らず。

祖父は江戸に在つて、つぶさに困苦を嘗めた。然かも忠臣は二君に仕へずと云ひて仕官の勧めを退けた。

其の業は則ち或は備書、或は舌耕、或は賣卜、一にして足らず、然れども數口を食はしむる能はず、小兒を人に托し、荆妻を南部邸に婢とす。然れども未だ嘗て一粒米の爲めに膝を侯伯に屈せず（西省日記）。

此の窮困の際、鹽谷宥陰は祖父を助けた。兩者の交は尋常の師弟でなかつた。同日記に、

余の鹽谷氏に於ける、獨り學問文章授受の事にあらず、或は金を賜ひ、或は物を貸し、朝暮家計の事に於ける、皆就て計れり。其の恩に涵泳すること豈尋常師弟の比ならんや。常に以謂へらく江都にて家を成し、老母を迎へて之を奉じ、又常に先生に従事し起居を奉ずれば、則ち其の恩の萬一を酬ゆべく、而して余の願亦た足れりと。而も勢ひ江都に留る能はず、今の一去は他日の面謁を期し難し。余の歎慨堪ゆる能はざる所なり。

とあるを讀んで子孫たる私も亦其の恩に感泣した。宥陰は祖父に、老母迎養のため他藩に仕へるも義に於て缺くる所なし、忠は天子に盡くすべきもの、何れの藩にても之を全くし得ると云ひ、切りに仕官を勧め且つ周旋する所あつた。

編輯餘錄 主筆

○本誌は本號を以て第五年目に入つた。本誌がかく繼續發行される事を私は常に不思議に感ずる。私の境遇、私の才能、私の性質悉く雜誌發行には適しない。殊に私の過去の經歷は我國の基督者の間に多數の知人を有せず、所謂地盤なるものは皆無である。基督教雜誌を發行する事は無謀と言へば此程無謀はない。然かも其の間に不健康と云ふ重荷をつけられて駄馬の足は屢々行路の難きを感じた。私は支出が一錢でも收入以上になつた時を以て斷然廢刊しやうと覺悟した。今も尙覺悟して居る。それにも拘はらず本誌は滿四ヶ年を無事に經過し、今や第五年目に入つた。本誌をして此の不信の日本國の一隅に在らしめ給ふ神にこそ讚美と感謝はあれ。

○近來益々深く感ずる事は我等が基督教を支持して居るから我國に基督教が存續して居ると思ふのは大間違であつて、福音が神の力であり、我等を支へて我等の信仰を支持し、我等を活かして居ると云ふ事である。我等の生存、我等の信仰生活その事が大なる驚異である。それは我等と偕に在つて我等を支持し

給ふ神の御力であるからである。

○本誌發行の最初私は重い病氣で半年以上病床に在つた。やがて起ち上つて二年の後今春再び健康惡化し今度こそは死を覺悟した。私はペンを執り得るのは多分今年中だけであらうと思つた。私は此の間に二十年以來常に其の姿を思ひ浮べて親しんだエレミヤを書こうと決心した。今や其の稿殆ど成つた。然し私はまだ死なない。最近憂慮すべく症狀次第に去り、多くの人々が不治絶望とする病症から回生しつゝある。私は今更に神の癒の能力を経験して御恵に感泣した。私には尙御用がある。人はその天職を果すまでは不死である。

○我等は金があるから、健康があるから、學問があるから生くるのではない。何者か我等を生かし、生くるに必要なものを備へ給ふのである。境遇は決して我等を新らしき境遇を作るのである。之を生物學について見るも鯨は手足が鰭のやうになつた故に泳げるやうになり、鳥に羽が生えたゝめに空を飛ぶやうになつたのでなく、或る時鯨に泳ぐ力が與へられ鳥に飛ぶ能が生じて現在の形に變つたのである。機能先づ生じて之に伴ふ形態が顯は

れたのである。力は何處より来る。天地を創造し給へる神より来る。神は福音をもつて我等に新創造を行ひ給ふた。『この故にキリストに在る者は新創造なり』とパウロは云ふ。基督者とはかゝる者である。

○今年本誌の豫定はキリストの十字架の闡明、エレミヤの研究、ロマ書の平易解釋、クロムウエル傳、内村先生に關する感想及び柏木教友會の寄稿を掲げる事であつた。大體その豫定の行程を進め得た事は大なる感謝である。明年はロマ書の研究に精神を傾注し度いと思ふ。こゝに汲めども汲めども盡きぬ生命の泉がある。キリストの十字架の死が人類にとつてどれだけ大なる祝福であり、キリストを信する信仰がどんな大きな事業であるかを説き度い。

○日支軍隊が滿州の野で衝突し、爾來兩國國民の感情は甚だ險惡であるのは痛嘆に堪えない我國の軍人にクロムウエルの如き信仰がないのが何よりも遺憾である。世界は益々混亂に向つて突進しつゝある。『今は眠より覺むべき時なり。夜ふけて日近づくぬ』である。此の際光明の所在を證しするこそ程基督者にまつて有意義はない。

江原萬里著

聖書の現代經濟觀

定價一圓二十錢 (送料八錢)
總布裝函入二八〇頁

此の度第二版發行。初版發行以來著者宛讀後の感想を寄する者甚だ多く、殊に不信者及び求道者の間に多大の反響があつた。本書は「ヤソ臭くないヤソの本」と稱せられた。生きて人の一生涯を指導する信仰のこんなものであるか。かかる信仰が此の地上に如何なる影響を及ぼしつつあり、如何なる結果を持ち來たらしめたかを知り度いと思ふ者には、本書は善き參考となるであらう。

内容抄録。故郷歸還、運命か攝理か、カリヤの春、士族の商法、胃の腑哲學、鈴木馬左也翁、カリン、基督者とは何者か、後篇富の増進。等長短三十篇。富の増進は著者が實業界在勤中の經驗を經とし、帝大奉職中の研究を緯とし、彩るに著者の信仰を以てした百頁の長論文である。ブルヂョア經濟學でもプロレタリアート經濟學でもない。基督者經濟學である。當に聖書の現代經濟觀であること。

著者の署名希望者は直接本社へ申込

長田穂波著

詩集 靈火は燃ゆる

定價 一圓八十錢
送料 十二錢

今の世に癩病患者程悲惨な者は滅多にない。彼等と思ふて心は暗くなる。人生にはそんなに大きな暗黒悲痛があるかを知る。若し人は肉だけで靈魂がいならば、之は悲惨の極であると云ひ得る。然るにキリストの十字架の贖罪は此の暗黒のさん底に光明をもち來らし、絶望を希望に、憂慮を平安、悲嘆を歡喜に變へ得る驚くべき力がある。神はかゝる奇しき御業を、キリストに由りて成し給ふを知つて今更に讚美する。人生は深い。ごの位深いかわからぬ。一見矛盾と見ゆる其の奥底に大なる調和があり、悲惨の極と見ゆる彼方に大なる樂園がある。此の詩集は人生の悲痛に悩む多くの人々に同情と慰めと光明とを與へるであらう。私は本書中著者の自叙詩「人の世の淵瀬」を讀んで同情の涙を潑いだ。(伏見市觀音寺町光友社發行)

聖書の眞理定價 (送料共)

一 部 二十錢
半年(六部) 一圓十錢
一年(十二部) 二圓十錢
海外一年分 二圓六十錢

拂込は振替東京六三三七五番
聖書の眞理社宛のこと

思想と生活 合本

第一卷 二 圓 送料八錢
第二卷 一圓八十錢 送料六錢
第三卷 二圓三十錢 送料八錢

昭和六年十月二十七日 印刷納本
昭和六年十一月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷 江原萬里
兼發行人

發行所 聖書之眞理社
東京市外澁谷町向山九七

發行所 一粒社 印刷所
名古屋市中區流川町一八

印刷所 東京市外柏木九四六

發賣所 獨立堂 書房
振替東京一九四六八